

ホセア書 10 : 8

ルカによる福音書 23 : 26～31

「何のために泣くか」

<刑の執行>

主日礼拝では、毎週ルカによる福音書を読み進めていますが、今はイエスさまの十字架の場面に差し掛かっています。

先週は、イエスさまが裁判を受け、ローマの総督ピラトがイエスさまには死刑になるような罪を見出せない、と主張したにも関わらず、ユダヤの人々の「十字架につけろ」という大声がまさって、とうとうイエスさまが十字架刑の判決を受けた、という場面を読みました。

十字架刑は、ローマ帝国で行われていた処刑方法です。それは、奴隷や身分の低い者にしか科されない、非常に残酷で恥に満ち、最も苦しくて悲惨な刑でした。

当時は、さんざん鞭打たれた後で、自分が磔にされる十字架の木を、刑場まで自分で担いで歩かされることになっていました。しかし、まずその鞭打ちが酷いもので、その時点で命を落とす者もあったと言います。

他の福音書のマタイやマルコには、裁判で十字架刑の判決が出た後、イエスさまが鞭打たれたこと、また暴力を振るわれている場面が描かれています。

ルカ福音書では、その場面が語られていないのですが、今回の場面に至るまでに、イエスさまは、すでにそれらの暴力を受け、身体的に酷く痛めつけられ、ボロボロになっていたと思われまます。

そんなイエスさまを、人々が磔にする刑場まで引いて行く途中の出来事。それが、今日の聖書箇所です。今日のところは、大きく二つの場面に分かれています。一つは、キレネ人シモンの場面。もう一つは、嘆き悲しむ婦人たちの場面です。

<キレネ人シモン>

まず、キレネ人シモンです。26節、「人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた」。このたった1節にだけ記された出来事です。

でも実はこの人は、マルコ福音書(15 : 21)ではもう少し詳しく、「アレクサンドロスとルフォスの父でシモンというキレネ人」と紹介されています。

後に、マルコ福音書が書かれた時代の教会では、「アレクサンドロスとルフォス」というのは、名前が知られた兄弟だったようです。彼らの父が、あのイエスさまの十字架を途中で代わりに背負わされた人だ、とって有名になっていたのではないのでしょうか。

つまり、この時、田舎から出て来て、通りすがりに十字架を背負わされたキレネ人シモンは、この後、どのタイミングかは知りませんが、自分が運んだ十字架に磔にされ殺されたイエスという方が、復活したことを知った。そして、この方こそ神の子であり、まことの救い主である、と信じるようになった。そして、キリスト者となり、教会のメンバーとなり、やがて彼の息子たちも信仰を与えられた、ということなのです。

しかし、今日語られていた出来事は、その時のシモンにとっては、迷惑千万な出来事ではなかったと思います。

シモンはおそらく、エルサレムで行なわれているユダヤ人の三大祭りである過越祭のために、田舎からわざわざ出て来たのでしょう。すると、エルサレムでは、今日死刑が行われるということで、町が大騒ぎになっています。

様子を見てみると、イエスという死刑囚は、鞭打たれ体がボロボロになって、もう自分の体よりも大きな十字架の木を運ぶ力も残っていないようでした。

すると、そこにいたローマの兵隊に、「おいお前、このイエスという死刑囚はもう自分で十字架を背負って歩いていくことが出来ない。だからお前が代わりに背負え。」そう言われて、無理矢理人ごみの中から引っ張り出されて、急に重たい十字架を背負わされたのです。とんだ災難です。

シモンはこの時、イエスさまを救い主と信じていた訳でも、愛していた訳でもなかったし、可哀想だから代わってあげたいなどとも思っていなかったでしょうし、イエスさまの十字架の本当の意味を理解していた訳でもなかったでしょう。

26 節に「シモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた」とあるように、ただただ強いられて、望んでいないのに十字架を背負わされ、イエスさまの後ろに付いて、イエスさまと一緒に歩いていくことになったのです。

外からの力によって、イエスさまと一緒に、歩まざるを得なくなったのです。

多くの聖書の注解者は、実は、この福音書の著者であるルカは、このキレネ人シモンに、本来あるべき弟子の姿を見ている、と受け止めています。

なぜなら、かつてイエスさまは弟子たちに、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(9:23、14:27)と教えられていたからです。

強いられて、望んでいないのに、十字架を背負うことになる。そうして、イエスさまの後に従って歩いていく。イエスさまの弟子の歩みは、イエスさまと共にあるために、迫害され、苦しめられ、重荷を、十字架を背負うものである、と教えられています。

でも実は、先頭に立って、最も重い、誰も担うことが出来ない、すべての人の罪の重荷を負っておられるのは、神の裁きの十字架を負っておられるのは、このイエスさまご自身でした。

この方の上に、わたしの罪が背負われている。わたしの重荷も、苦しみも、悩みも、死も、すべて背負われている。だから、従うことが出来るのです。

そうして、イエスさまの後に従って向かう先は、イエスさまが獲得して下さる、罪と死への勝利です。罪の奴隷から解放され、神の子として、新しい命に生きる道です。イエスさまが、ご自分の十字架の死によってわたしたちの罪を担い、わたしたちが受けるべき神の裁きを代わりに引き受け、罪を贖い、赦しを得させて下さるから。わたしたちはイエスさまの後に従って、神の御国へと歩いていくことが出来るのです。

この救いの中に置かれているからこそ、弟子たちは、わたしたちは、この世における自分の十字架を負って、重荷を担って、イエスさまの弟子として歩いていけるのです。これは、自分の覚悟や、熱心によって背負うものではありません。強いられて背負うのです。しかし、そうやって後ろから従っていく中でこそ、ますますイエスさまが背負って下さっているものを見る。ますます先を歩いて下さるイエスさまの力と恵みを知る。それが、弟子の歩みなのではないでしょうか。

さて、キレネ人シモンは、この時は何も知りませんでした。しかし、イエスさまがすべての人の罪を贖うために、救いの御業を成し遂げようとされている、勝利へと向かっている、その道のりの中で、シモンは後ろに従う者とさせられ、共に歩む者とさせられたのです。

強いられた中で、しかしシモンはイエスさまの十字架を負いながら、最も近くでイエスさまの十字架の贖いの死、救いの御業を目撃する者とされました。そして、十字架の木よりもさらに重い自分の罪を、裁きの死を、すべてこの方が背負って下さっていたと知ったのです。

わたしたちもまた、そのように歩む道が備えられています。イエスさまは、「自分の十字架を負って、わたしに従いなさい」と言われました。

イエスさまに従う歩みには十字架の木の重み、苦しみが伴います。

しかし、イエスさまの背中には、すでにわたしの罪も、裁きも、死も、滅びも、すべてが担われているのです。この方にあって、わたしたちには、もう救いが与えられており、罪が赦されており、復活と永遠の命が約束されているのです。

この方と共に歩むなら、この方の後にこそ従うなら、わたしたちは自分の十字架を背負うとしても、何も恐れることはないのです。

<泣く婦人たち>

さて、キレネ人シモンは、イエスさまの十字架を担がされたことで、この時は分からなくても、やがてイエスさまが背負って下さっていたもの、それが自分の罪であった。自分が受けるべき神の裁きであった。自分に科されるべき死であった。そのことを知ったに違いありません。

そして、次の 27 節以下のところでは、そのことをイエスさまが、今度は嘆き悲しみながら従って来た婦人たちに気付かせようとして、語られるのです。

もしかすると、イエスさまのすぐ後ろで、十字架の重みを感じながらこれを聴いていたシモンは、このイエスさまの御言葉によって、イエスさまが成し遂げようとしておられることに気が付き始めたのかも知れません。まあ、でもこれは想像に過ぎません。

さて、27 節には「民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った」とあります。そして、イエスさまは婦人の方を振り向いて言われるのです。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。」

この、イエスさまに従ってきた婦人たちが、どのような婦人たちだったかは、いくつか説があります。一つは、ガリラヤからこれまでイエスさまと旅を共にしていた婦人たち。

もう一つは、葬りの時に嘆き悲しむことを仕事としていた「泣き女」たちです。「エルサレムの娘たちよ」とイエスさまが声をかけておられるので、もしかしたら、このエルサレムの町の泣き女だったのかも知れません。当時、囚人は泣き女を雇ったりは出来ないので、彼女たちは死刑の時にボランティアで泣いてやるがあったそうです。それが、宗教的には功德を積むことになる、とも考えられていました。

どちらにせよイエスさまは、「わたしのために泣くな。むしろ、自分のために泣け」と言われました。婦人たちが泣いていたのは、イエスさまへの同情のためです。あの最も残酷な十字架に架かって、これから大いに苦しんで死ななければならないなんて、なんておかわいそうに。おいたわしや。お気の毒に。

しかし、イエスさまは、そのような涙は求めておられません。むしろ、自分自身のために泣け、と仰ったのです。そしてその後、いくつかのことを語られました。

まず、「人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る」と言われました。

これは、当時は子を与えられることが神の祝福を示す一つの表れでしたが、神の裁きの日が来たら、その裁きの厳しさ、苦しみがあまりに大きいので、子を持つの方が大変な思いをする。大きな苦しみを覚える。だから子を持たない者の方が幸いだと言われる日が来る、ということです。これは、神の裁きの厳しさ、恐ろしさを示すものです。

次の御言葉は、今日読まれた旧約聖書のホセア書からの引用です。イエスさまはこう言われました。「そのとき、人々は山に向かっては、／『我々の上に崩れ落ちてくれ』と言い、／丘に向かっては、／『我々を覆ってくれ』と言い始める。」

「そのとき」。これもまた、神の裁きの時を示しています。神の裁きの時に、人々は山に向かって、我々の上に崩れ落ちてくれと言い、丘に向かって、我々を覆ってくれと言う。

つまり、神の裁きを受けるよりは、いっそ生き埋めになった方がましだ。その裁きを経験するくらいなら、死んだ方がましだ、ということです。それほど、神の裁きが恐ろしいと。

最後には、『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」と言われました。生の木とは、罪のない、命の主である神の御子イエスさまのことでしょう。一方、枯れた木とは罪人のことです。エゼキエル書の 21:3 には、神さまが裁きのために火を放たれ、青木も、つまり命のある生の木も、枯れ木も燃え尽くす、という言葉があります。生の木でさえ燃やされるなら、枯れた木は、神の裁きの炎の前で、なおさら燃え盛ることでしょう。そうなったら、いったいどうなってしまうだろうか。

つまり、イエスさまは、今、ご自分が受けておられる苦しみは、神の裁きの苦しみだと言っておられるのです。

しかも、それは本来、罪を犯した者が受けるべき神の裁きでした。イエスさまには、罪はありません。イエスさまが受けておられる神の裁きの苦しみは、本当は、わたしたち罪人が受けるべき苦しみでした。命の造り主であり、命の源である神さまから自ら離れ、自分勝手に歩み、神さまに背き、逆らい、御言葉を忘れて歩んできた者が、その罪のゆえに、終わりの日に受けなければならない、神の裁きの、恐ろしい、究極的な苦しみなのです。

ですから、婦人たちは、またわたしたちは、イエスさま、なんと痛々しい、苦しそうだ、残酷だ、可哀想だ…そんなことを言っている場合ではないのです。

イエスさまは仰るのです。「これは、本当はあなたが受けるべき罪の裁きの結果だ。このわたしの悲惨さ、苦しみ、十字架の死は、それだけあなたの罪の大きさ、罪の深さを物語っているのだ。この神の裁きの炎は、本当はあなたに放たれるべきものなのだ。」

だからイエスさまは、「わたしのために泣くな。わたしの十字架の苦しみに、あなた自身の罪を見つめなさい。これほどの裁きを受けるべき罪を、神さまに対して犯していたということを知って、あなたは悔い改めの涙をこそ流しなさい。」そう仰っているのです。

<救いの中での悔い改め>

わたしたちは、イエスさまの苦しみ、受けられた痛み、裏切りや、呪い、辱め、そして十字架の死を見つめる時。それらが、わたしのためだった。わたしの罪を、この方が代わりに担って下さったために、イエスさまが十字架の苦しみを受けておられるのだと、知らされず。自分が抱えている、本当に悲惨な罪に気付くことが出来るのは、どれだけの裁きを受けなければならないかを知ることが出来るのは、その罪の裁きを代わりに受けて下さり、わたしの十字架を代わりに背負い、わたしの代わりに十字架に架かって下さった、神の御子イエスさまのお姿を見ることによってなのです。

しかし、驚くべきことに、それは同時に、わたしたちはすでに、イエスさまがそのようにして、わたしの罪を担い切って下さった、ということ。わたしの罪も、裁きも、神さまの怒りも、滅びの死も、すべて救い主として引き取って下さり、ご自分の十字架の死によって、神さまの赦しを得て下さったのだ、ということをも知らされるのです。

「わたしのために泣くな。自分のために泣け。」

わたしたちが、イエスさまの十字架の苦しみと死に、神の裁きの厳しさを思い、自分の罪の深さを思い、悔い改めの涙を流す時。同時に、わたしたちは十字架の上でその罪も、苦しみも、裁きも、すべてイエスさまが背負って下さったという、救いの喜びの涙、罪を赦された感謝の涙をも、流すことが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

自分が自分の神であるかのように、自分が自分の支配者であるかのように、神さまの御心を見無視し、逆らい、自分の心に従って歩むわたしたちの罪をお赦し下さい。わたしたちは自分の罪をも知らずにいましたが、それは神の御子イエスさまが、十字架において、ご自分の命によって贖いを成し遂げて下さらなければならないほどの罪でした。

悔い改めて、神さまのもとに立ち帰らせて下さい。

しかしまた、わたしたちの罪を背負って下さったイエスさまの十字架は、わたしたちの罪の赦しを宣言し、復活によって、新しい、神さまと共に生きる命が与えられている約束を示して下さいました。

喜びと感謝をもって、イエスさまの救いの恵みを受け取る者とならせて下さい。

神さまの御前で、わたしたちは共に罪人であり、また共に罪を赦された者です。救い主イエスさまの十字架の御前で、わたしたちもまた互いに愛し合い、赦し合い、イエスさまの後ろに従って共に歩いていくことが出来ますように。

その中で負う自分の十字架も、イエスさまの恵みの中でこそ担うことが出来ます。わたしたちを強め、助け、導いて下さい。

このお祈りを、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン